

---

# **約束の木～世界の伝説と時の遺産～**

Yui

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束の木～世界の伝説と時の遺産～

### 【ISBNコード】

N8693A

### 【作者名】

YU-i

### 【あらすじ】

世界の伝説碑文に書かれた歴史ページには、かつて、彼らは一つだった、と言い残されていた。人、光と闇。それは世界創造から千年の時も繰り返される血争いにより、この世は闇の魔界、光の幻界、人の世界という三つの世界に分かれた。だが、哀れと見た神は、時の魔術師、の存在を創り上げ、時と共に世界を再び一つとなり、彼らの心と安らぎの平和が一つとなつて戦いを終わらせた。しかし、世界の伝説碑文にはまだ続きがあった・・・。

## プロローグ～世界の伝説（前書き）

「Under Another Sky」ユウイの旅」の作者であるYuuイです。「Under Another Sky」ユウイの旅」とは別のファンタジー物語で、新たな冒険と世界が溢れる作品です。

## プロローグ 世界の伝説

### プロローグ

遙か昔々、神は世界をお創りなつた。人、光と闇の世界。かつて、彼らは一つだつた。だが時は、力を欲望する者、無謀で血を飢え続ける戦いが生まれた。互いは嫌い合いながら争いと悲劇ばかり繰り返してきた。こうして、世には三つの世界に分かれた。闇の魔界、光の幻界、そして人の世界。しかし、それを哀れと見た神は一つの世界に戻すべく、‘時の魔術師’(Time Lord)の存在を作り上げ、こうして再び時と共に世界は一つになつた。それは総合された世界、‘アルマーノ’。数千年も時を経て、世界の人族、魔界の魔獣族、幻界の妖精族が平和に暮らす世界になつた。

だが、時は世界に約束を果たさなかつた。‘時の魔術師’の影から生まれた‘闇・時の魔術師’(Shadow Time Lord)。世を企み、そして恨み続ける‘闇・時の魔術師’は己でもある‘時の魔術師’を自ら生まれた影の世界に封印し、この世界に変わつて降臨した。神にも抑えれない力を持つた‘闇・時の魔術師’は影に染めようと、再び世界と族を引き離そうとした。しかし、神から選ばれた五人の賢者(God's Sage)は、その‘闇・時の魔術師’を封印すべく、己の魔力と魂を引き換えに、その者を影の世界に戻した。こうして、‘時の魔術師’は救われ、世界に平和を取り戻したのである。

その後、神に選ばれた五人の賢者達は、これらの出来事である‘世界の伝説’をその世間に伝えた。次の世代に名を残し、血が今日も流れ子孫達は封印に閉じた‘闇・時の魔術師’を見守り続けた。数百年後、影の存在である‘闇・時の魔術師’の封印が解かれる時

が来た。それは、ある者の力によつて・・・。

## プロローグ「世界の伝説（後書き）」

「Under Another Sky」ユウイの旅」と「安らぎの木～世界の伝説と時の神」という二つのファンタジー作品を同時に連載させていただきます。これからも頑張りますので、またよろしくお願いします。

## 第一話・始まり（前書き）

今日から第一話として、この作品をスタートします。

## 第一話・始まり

時は同じくして、数百年後のアルマーノの世界。広がる世界に、この静かな町に暮らす人族だけが住む、ベリアーク（町）がある。この町は、お金持ちであるゴルーミの屋敷に住むゴルーミ伯爵が仕切る家主だった。だが、治安が良いとは言えず、家主に町中で税金を高く取り上げられた挙句、その金を盗もうとする盗賊やごろつきなどが大半に住みついていた。今や屋敷内での警戒が厳しく、金や宝を盗もうとする大胆な者はいなかつた。だが、その屋敷に宝を盗もうと覚悟を決めた一人の大胆な盗賊がいた……。

「よつしゃ！ またいただ一き！」

沈黙に包まれた深夜。灯りのない高い建物のとある窓から入り込んだ一人が大声で叫ぶと、いつのまにか奥の部屋にいた。宝や金目を捜す間、その時。ドアの外から別の足音がこちらに近づいてくる何者かの気配に気づいた。その人影は一瞬迷っていたが、素早くその場から立ち去ろうとしなかつた。足音を殺してもさらに奥へと進もうとしたとき、突如背後から電燈の明かりがその影は照らされ、その人影は振り返った。そこには、警備員だと思われる年配の男がその人影の正体を確認すると、突然怒鳴るような大声で叫んだ。

「見つけたぞ！ この、こそ泥棒が！ 盗賊めが、ぜつたいに帰さぬ！」

「げ！ やつべ！ ……。また見つかっじやつたか？」

照らされたその人影は、よく見ると身体全体に黒いマントを着て、フードを頭上に覆い被せた小柄の少年の姿だった。その怒鳴り声で思わず身をこわばせら少年だったが、にやと微笑んだ。

「でも、いいもんーね。俺も、またじーさんの宝をもらひつぞよ！」少年は右のポケットから手を伸ばすと、キラキラと輝いていた石を持つ首飾りだった。その首飾りを見た年配の男は唖然と見て、一瞬

金縛りのようすに身体が固まつた。相手に隙を見せてしまつても、年配の男は驚きの表情を浮かびながら、その首飾りを指した。

「な、なに？ い、いつのまにーー？」

「へへ！ 隙ありつと！」

その少年はそう言い残すと、いつのまにかその警備員の脇に通り過ぎた。地面を蹴つても窓に向かつて走つた。それに気づいた年配の男は、「しまつた！」と言うのも遅かつた。からくも危機を逃れた少年は、手近な窓から外へと軽やかに飛び出した。もはや追いつけないと判断したその年配の男は壁についてあるボタンを叩くと、その同時に警報のベルが鳴つたのである。建物の中で眠つていた人々がそのベルの雑音の原因で起き上がり、明かりをつけて間もなく騒ぎ始めた。あの首飾りがあの盜賊少年に盗まれてしまつた事を…。しばらくして、その建物から逃げた少年は高い枝から枝へと、飛び移ると急に立ち止まつた。フードで顔を隠していたその少年の表情を伺えれなかつたが、後ろに振り返ると、口もとに勝ち誇つた笑みを浮かんでいた。

「バー力！ あいつらなんかに、俺を捕まるかよ。さて、この宝も価値あり？」

そう低くつぶやくと、少年はすぐに次の枝へと飛び移り、その場から逃げ出した。だが、その少年がさきほど立ち止まつていた枝の下に、茂みの物陰から、その様子をすべて見ていた人影があることにも気づかずに。

朝の日差しが、町全体を照らす翌日。並び立つ建物を囲まれる町中の人々が多く姿を見せ、賑やかな雰囲気が漂つ。道端には、朝の市場が立ち並び、人々が買い物をしているのをちらちらと見える。人々が群れる中、いかにも怪しげな一人は黒いマントを着て、フードを被つてずるずると引きつきながら歩いていた。昨夜の泥棒と思われる少年だった。当の人々はその正体をまだ知らないのである。歩く度に、あちこちから人々の噂が聞こえた。ビニールの買い物袋を

たくさん抱えた大柄なおばさんが、通りすがりに友達に話しかけるのを、その少年の耳にはつきりと聞こえた。

「ねえ・・・聞いた？ 昨夜に、またあのゴルーミの屋敷に泥棒が入つたですって。きっとあの例の盗賊団の一昧の仕業だという噂よ。」

「まあ！ 大胆なこと。あの屋敷に入るなんて、死に行くようなもんよ。例え、宝が手に入れても、犯人が分かれば・・・」

それを聞いたその少年はなるべくその話を聞かないように足を速めた。突然知らないうちに誰かの肩にぶつかると、「おい！ 気をつけろよ、小僧！」と見知らない男に注意された。たが、その男はそのまま立ち去ったのである。あらためて少年はどこかへ向こうかのように歩いているうちに、道端にあつた小さな八百屋からおばさんがその人に話しかけてきた。

「やあ、あんた。今朝のうわさをもう聞いたかい？ 昨夜、あのゴルーミの屋敷にまた泥棒が入つたですって。かなりと屋敷は大騒ぎして、町中までその犯人の調査に来ると聞いたわ。もづ、知っているでしょ？ 捕まえれば、かなりとお手柄だと思うがね・・・。」

それを聞いたその少年はその場で立ち止まるときくと表情が変わつた。だが、その人はフードで顔を被つていたため、周りの人からその少年の表情を伺えなかつた。

「おばちゃん！ 今はそんな冗談よりも、早くそのドアを開けてよ。俺も、いろいろと急いでいるし・・・。」

そうつぶやいた少年の背後に、「財布泥棒、どこだ！？」とわめきながらその泥棒を追いかけると思われる一人の男がその少年のそばに通り過ぎた。さつき、歩く途中で知らない人の肩をぶつかつたあの男だった。気が付くと、その少年はいつのまにか早業でスリをしたのである。その少年はさらに顔を隠すように、おばさんの視線をそむけた。それに気づいた目の前にいたおばさんは微笑んだ。

「あ、なるほどね。今度は、それねえ・・・。ま、いいわ。早く入りなさい。（静かで低い声に変わると）また捕まえないいうちにね。」

「悪いな、おばちゃん。また今度おごるよ。」

「はいはい。そのうちにね。」

おばさんは背を向けると、田の前にある建物のドアを開けた。少年は頭を少し下げる、急いでおばさんの後をついていた。おばさんはその少年にお別れの挨拶をすると、すぐに商売に戻った。少年はそのドアにこいつそりと入ってしていく。誰も気が付かずに。

そびえ立つ建物のドアを入った瞬間、辺りは薄暗かった。だが、その少年は先に進む道を知っているからのように、ひたすら奥へと進んだ。万が一のため、転ばないように壁を手で支えながら歩き、そして角に曲がった瞬間に、地下へとそびえる階段にゆっくりと降りた。やつと地下に着いた少年は、田の前にある木の扉を開くと、辺りがぱっと明るくなった。そこにはかなりと広い部屋で、天井にいくつかの天球が照らし、辺りに入々の賑やかさと歓声が上がる。そこには、長いカウンター形式のテーブルの奥に顎ひげを生やしたバー・テンがコップを布で拭いていた。あちこちに小さな丸いテーブルを囲んでいるのは、たくさんのならず者や泥棒、盗賊達が集まり、煙草を口にくわえながら洋酒を飲んだり、トランプなどでの賭け事をしたりをする酒場だつた。ここを仕切つてているのは、ある盗賊団。その名は、‘タイグーニル団’。ジャック・ハウロールという有名な名を持つ盗賊の頭を中心に、この酒場をアジトとして盗賊などが集まる場所である。その盗賊の一昧と思われるその少年は、周りの人を気にせずにカウンターに着くと、ようやくその少年に気づいたバー・テンが不敵に笑みを浮かびながらその少年を暖かく迎えた。

「おお！やつと来たか、チビ！お前も、でかしだぞ。昨夜の話、町中でうわさになつてゐるぜ。こゝもそつだが、そのような大胆な行動をするのは、おまえだけだつと・・・みんな、知つてゐるぜ。んでも？何を盗んだ？」

‘チビ’とは、その少年は小柄だつたため、みんなからあだ名としてつけたのである。

‘（なんだ・・・もうみんなも知つてたのか。）まあ、まあ・・・

・。そんな焦るなよ、バーテンのおじさん。まず、親分に言わないとな。また俺を叱りにくるしよ。あ、この間の続きのお説教だよ。

「何をしたんだい？その、この間のことは・・・。」

「ああ・・・。教えていなかつたつけ？この間、他のダチと前々と計画した屋敷での宝盗みでな。あの屋敷で俺は危うく正体にもばれて、もうお少し捕まりそうになつたその説教だよ。その時は、親分が助けてくれたけど、その失敗が許せなかつた。だからよ、俺のせいだつたというわけだ。だから、俺は昨夜で、リベンジしに行つてきたんだ。一人でな。」

「はははは！こりや、すげーな。でもな、あの親方はチビのためだと思つて叱つているから、少しありがたく思えよ。普通の部下じゃ、パンチかキックでも食らうよ。」

「けどよ・・・。めんどくせよな、あのジジは・・・。ガミガミ！とうるさいし、人に関してもそつだし。酒ばかり飲んで、そこいら辺の女と付き遊んでいるし。」

「酒くせエロ口オヤジか？」

「そうそうーその一言といふと・・・つて、えつーーー？いつのまに！」

その少年は思わず背後を振り返ると、そこには巨大な人影だつた。親分と言われた六十代ぐらいのおじいさんだつた。盗賊のお頭のような格好をして、なにより印象に残るのは長い顎ひげと派手な虎の模様した赤いバンダナを頭全体に巻いていた。老齢のわりには引き締まつてがつしりとした身体をしている。全身から発する威圧感が、相手の大きさを何倍にも感じさせた。「あ、やつベホー！」と思わず少年はその場でタジタジとなつて、フードがずれ落ちそうになつた。そう、その盗賊のお頭と思われたそのおじさんは、あのジャックという名前だつた。みんなから親分と従われる偉そうな人で、その同時にその少年にとつては一番苦手な人物である。

「今度はまたあのゴルーミの屋敷に行くとはな・・・。エドー！何度もやれば、気が済むんだ！え？おめエ、何様だと思つているんだ

！？」

その親分と思われるおじさんは表情に怒りに引きつると、少年を見下ろした。あんまりにも大きな怒鳴り声で、周りの者達は一斉に止まつたかのように振り返った。エドーを呼ばれた少年はふてくされた顔で親分の説教を聞かされていた。面倒くさそうな表情を浮かんでいたエドーはフードを抜くと、素顔を現した。きれいな銀色の髪の毛は、ばさばさと逆立てるようにそろえ、前髪を上から垂らした、ちょっと切れ長の目をしていた少年だった。左の片耳に大きな輪のアーリングと、顔には左の眉に向かつて右目の下まで、鼻を横切った斜め線のような古い傷の痕がある。しばらく時が経つうちに、いつまでも親方の説教を続ける中、周りから笑い声と驚きの声が混じつた歎声を上げる。いつまでも周りが盛り上がるのを見飽きたバーテンは、その親方をなだめようと、少年を見た。

「まあ、まあ、ま、親方も。そう言わずに、今日は多めに見てあげてな。チビも一人であるゴルーミの屋敷からいい宝をもらつだけでも、いいじゃないのか？普通の大人じゃ、あそこに忍びのも、無理な話だしな。捕まらないだけでも、幸いだと思つて……。今回はね……。」

バーテンはガラスのコップの上にはあはあと息を吐くと、布で急いで拭いた。それまで固い表情しか浮けべなかつた親分はしおうがないとため息をもらすと、エドーの頭上に手を置いた。エドーをにらむと、その場から立ち去ろうとした。親分が黙つて背を向けると、鼻をふんと鳴らした。

「あんま、わしはおまえを認めたくないけど……。その宝、あとで見せてきな。わしもいろいろと忙しいじゃ。ほら、ベルーク、ホンジ！おまえら、仕事だ。いくぞつと！」

近くのテーブルでトランプをしていたベルークとホンジと呼ばれた盗賊の格好した男達は、「は、はい！」と返事すると、親分のところへ向かった。親分の左右に並び立つと、まるでボディガードのような巨漢な二人だった。右に立つ男は軽量なベストとハーフパンツ

を着たポーカーフェイスなベルーク、左に立つ男は簡素なタンクトップと長いズボンだけで、茶色の髪の毛をバンダナで額当てとしてまとめて逆立つ、田立ちあがりなホンジ。しばらくして、親分は奥にあるもう一つの出入り口のドアを乱暴にあげると、ベルークとホンジはエドーを振り向き、にこっと笑いながら親分の後をついて行ってしまう。おそらく、「またあとでな」というサインだろうか。ドアがぱたと閉めると、周りの人達はざわざわと騒ぐうちに、それぞの場所であるテーブルに席をつきながら、また賑やか雰囲気に再開した。

「命拾いしたぜ・・・。サンキュー、おじさん！」

「いや、いいんだ。それより、チビも、大変だな。盜賊の仕事をして・・・。」

「ああ、俺だつて小さい時からなれっこだからな。でも、少しぐらい俺を褒めてくればいいのにな、あのジジ親分も。俺だつてちゃんと宝を盗んだのによ・・・。今度は、山よりもでかエ宝を持ってきてやるつてのー！」

エドーはほこりを払つて立ち上がりながら低くつぶやいていた。それを聞いたバー・テンは笑つた。

「うーん。間違いないな、これは。本物の宝石かもな、その石も価値がありそうだそつじゃな。でも、ま・・・。それにしても、よくやつたな、チビ。」

低く唸つて言つたのは、親方だった。エドーが昨夜、ゴルーミの屋敷から盗んだ首飾りを、親方の部屋で見せていたのは眞頃。親方がテーブルの上でその首飾りを鑑定した結果、その宝にも価値があると言い、なげにエドーを褒めた。少し元気になつたエドーは徐々に笑みを浮かぶと、いつのまにかエドーの隣にいたベルークとホンジもエドーを褒めたのである。

「前よりもましになつたな、チビ？」

「こんちくしょー！エドー。でかしたぞ！」

二人はエドーの髪の毛をくしゃくしゃにするべし、エドーは一人の手から離れようと必死だった。

「それで、親分？俺も、次の件にまぜてくれよ。」の間、言つてたじやん。もし、俺が宝を一人で手に入れたら、親分に盗賊としての腕を認めよう、つて……。だからよ、頼むぜ！」のとおりだ、親分！ちやんと宝を盗んでみせるからよ！」

ベルークとホンジからやつとの事で離れたエドーは手を合わせ、目の前にいる親分に向かつて頭を少し下げた。その光景を見た親分は腕組みをしてうーんと低く唸つた。その時、ベルークとホンジは一齊に頭を下げた。それに気づいた親分は思わず眉をひそめた。

「なんだい、お前達まで……。そんなにチビをあの件を出させてやりたいのか？え？あんな危なさそうなやつを？」

「はい！おれらからもお願ひします、親分。チビにも、いろいろと勉強きるじゃないですかね？何かあつたら、おれらがなんとかします……。はい、命でもかえて……。」

ホンジがそう言つと、ベルークは頷いた。どうやらホンジと同意しているようだ。それを聞いたエドーはほんのわずかの期待を抱いて親分を見たが、表情を固くした親方の答えはそつけなかつた。

「はあ……まったく。今の若い人には、まだまだ分からぬのか。いいか!? 盗賊つつもな、ただ宝とかを盗むだけじゃないんだぞ。世間では、わしらは単なる盗賊じゃが、本来はわしらは義賊。義賊とはどんなものか、知つておるか？」

「（ また出たよ……。ジジのお説教だ。） ああ、そんなもん俺だつて分かるよ。」

「バカもん！お前のようなうまいこと口どもは単なる宝好きの盗賊だ。だが、わしらは違う。今この町に、『ゴルーミ』の屋敷のような悪党は、わしらのような一般な市民の金を奪うばかり。じゃから、わしらはこの盗賊……じゃなく、義賊団を結成したのじや。」

「はい！ まったくその通りです、親分！」

「でもよ、ジ……じゃなくて親分。どうせにしても、宝や金を盗

むために行くんだろう？

「違う、世の中はそんなに甘くないからじゃーいくら宝好きでも、理由なしで、わしの許可なしで他人の物を盗んだりするのは、知つてとおりに、わしのルールの第一条を破ることになる。その時、どうなるか、もう分かつているじゃろうな？」

「第一条、第一条……あー第一条って、まさかあれですか！？」

「なんだい、ホンジ？ あれって？」

「知らないのか、ベルーク。第一条：もし親分の命令や特別の場合を除いて、理由なしまだは親分の許可なしで、他人から宝や金を盗んだ場合、親分から罰を食らう。その罰とは……。」

エドーは大きな唾を呑み込むと、ベルークが思い出したかのように静かに答えた。

「親分から十回のげんこつと、その金を持ち主に返し、処分はその持ち主が決める権利を得る。それと、親分の許可に違反した場合は、親分の名によりこの、タイグー二回、を抜けさせると認める……。」

「そうじや。分かつたか、お前達！ それと、エドーも。分かつたら……、次は覚悟をするんじやな。いいな、特にエドー！ お前だ！ 次の件で、またこの間みたいに失敗したら、その第一条を破ることになる。分かつたか？」

「はい、親分！」

「あ、はい！ ジジ……じゃなかつた。親分！」

「それにしても、やつベエな！ 僕とした事が、あの時に財布を理由なしで盗んできたが。ま！ いいか。ジジにバレなければっと……。」

エドーは内心でそう呟いた。あれだけは親分に知られたくないため、ただひたすら祈っていた。そこで、親分は立ち上ると、すぐにこの部屋から立ち去ろうとした。エドーやホンジの間に通り過ぎると、それに気づいたベルークはドアを開け、親分が黙つて一人で外に出

た。外に出た親分を見て、慌ててホンジは親分を追いかけると、ベルークとエドーは一瞬に顔を見合わせた。突然、ベルークはにやりと微笑むと、エドーの背中を思い切りぽんと叩いた。

「いて！何するんだ、ベルーク。」

「よかつたじやないか！お前も、あの件に仲間として入れてもらうなんて・・・。親分、の方はそう言つているけど、本当はお前を認めざるおえないんだ。なにせよ、あの時の失敗後に、親分がお前と約束しただからよ。」

「約束？あ、ああ・・・。あれか。もし、俺が宝を一人で手に入れたら、親分に盗賊としての腕を認めよう、ってやつか。」

「親分はどんな約束を守るお方だからな・・・。の方は義理と人情を守る義賊の偉い方だからな。それに明日朝早く親分がここで集まるでな。そこで、どこで何を盗むか、説明するからな。それじゃ、またな。」

そう言い残すと、ベルークは部屋に出た。誰もいない部屋に取り残されたボツンとしていたエドーは啞然として立つていたが、徐々に笑みが浮かべてくる。言葉を口に出さなかつたエドーだが、心の奥から自身の腕前を認めた事を、みんなに感謝していた。盗賊の誇りとしての嬉しさが・・・。

## 第一話・始まり（後書き）

「Under Another Sky」コウイの旅」という作品と同じく、少しずつ物語の人物紹介や世界観、話の後書きなどを載せますので、（まだ未熟なのですが）よろしくお願いします。

## 第一話・盗賊団（前書き）

前回のあらすじ：

主人公のエドーは盗賊として、昨夜この町の家主で悪党なゴルーミの屋敷で宝を盗んだことで、翌日に一時的の有名な噂に流れた。エドーが所属している盗賊・タイグニール団のアジトである酒場で、親分のジャックがその事で手柄を立て、エドーを一人前の盗賊（義賊らしいが）として認めたらしい。そこで、エドーが前々からジャックとの約束が今日果たしたため、次の宝盗みの件で仲間を入れてほしいという願望した。同じ盗賊仲間であるベルークとホンジも頭を下げたまでも、親分にもお願いする事に。そして、頑固だったジヤックはそれを認める事に・・・。

## 第一話・盗賊団

翌日の朝、酒場は静まり返っていた。あれだけ昨日に、わいわいと騒いていたならず者達はここにいない。バー・テンはカウンターを布巾で拭くと、あちこちの小さなテーブルは輪のように置いていた。小さなテーブルに囲まれた中心には、広々とした床。そこには、數十人かの盗賊達は集まっていた。エドーは相変わらずマントを着て、フードを被つていた。表情からうかがえないが、腕組みをして周りの人達の様子を見ていた。エドーが見渡す限りでは、カウンターの所で立つているベルーケの姿が見えた。床の上であぐらをかけて座るホンジもいれば、テーブルの上に座つて欠伸をするクンジもいる。クンジはホンジの幼なじみで、はげ頭が特徴である明るい人。彼らの年が近いこともあり、エドーの感覚をよく理解してくれる兄貴分のような身近な存在である。だが、よく子供扱いされるが親しい友人もある。気が付くと、煙草を吸つて壁の隅で、寂しさを漂いながら一人で立つ女性がいた。どうやらこの盗賊団では紅一点である手下達だが、エドーとは長年の顔見知りである。彼らは、親分が来るのを待つていた。エドーは待つのに疲れて、思わず欠伸して寝ようとした。その時、突然外から出入り口を乱暴に開くと、周りの人達はその出入り口に一斉に注目した。そう、彼らの盗賊団の頭であるジャックが現れたのである。

「よーし、お前らー！今日の仕事の件を説明するぜー！今日は今までよりも、もつと過酷で大変な仕事だ。志をしてよく聞け、じゃが聞いて驚きなよ。」

ジャックは真ん中に立つと、辺りを見渡した。周りの人達は、自分の親分を視線を注ぐ。だが、エドーだけは欠伸をしながら、呑気な口調で口を開いた。

「親分！またどうせあの屋敷に忍び込むでしょう？大した……」「こら、エドー！よく、人の話を最後まで聞け！」

「はいはいと、親分。」

ジャックはエドーのぶっきらんぽな態度を見て、思わず怒鳴り返そうとした。だが、近くにいたホンジはジャックの背中を突付くと、小さな声でささやいた。

「親分！チビをほつといて、話を次へ……」

「ああ、そうじゃった。いいか、お前ら！次の仕事は、ある宝を盗むこと。じゃが、それが実在するかは、不明じゃがな……。どういうよりもなんだが、まずお前らは、世界の伝説の話を知つているよな？」

「ああ、俺も聞いた事があるよつな気が……。」

「そういうえば……。あの伝説の話だろ？がよ。世界創造からの争うをある力で治めたやつでしょ？が」

ホンジがなにげに言うと、クンジは心当たりがあるかのよつに答えた。それを聞いたあちこち周りの者達からざわざわと騒ぎ始めた。そこで、エドーは手を上げて、質問の確認するためにジャックに尋ねた。

「世界の伝説、って、昔三つの世界に分かれていた三つの種族が互いに争いをして、その時に神様がいたんだけな？神様は、‘時のなんとか’を創つて、時と共に世界を一つになつて、争うを終わらせたというおどき話だろ？？」

「おどき話までではないが、ま！そ？じやな。‘時の魔術師’と呼ばれた時の力を持ち、時代が流れることに、世界はこうして一つなつた。じゃが、その伝説の話は、実在するかはどうかは……。とにかく、わしはその事を興味を持つてな、それを調べるうちに、わしのある古い友があるを見つけた。その伝説の中に、何かお宝のよつなものがあるかもしれないと言つていた。その‘時の魔術師’は時の力を持つていたから、何か遺産のような宝があるかもしれないといと確信したのじゃ。だが、残念ながらこれからわしらが盗むのは、

その宝に関する物のヒントじゃ。なぜなら、いくらわしらでもそれに関する情報が少すぎる。」

「でも、それは伝説だろ？ジジ……じゃなく親分！」

「だからわしはそれが実在するかは、不明だと言つた！じゃが、伝説の宝などがこの世界に眠つていることが確かなんじゃ。わしの考えではな、たとえそれが伝説だと知つても、あり得ないと言われても、それを搜す価値があるじゃろう？それが盗賊といつもんじやが「なるほど。でも、ちょっとまつた、親分！！」だつて、それは伝説の宝に関するヒントなら、どうやって見つけれ……」

「じゃから、話は最後まで聞け！わしの情報によると、ここから山と森を抜けてすぐに、バサーム（町）にある金持ちな貴族、ま・あの悪党なゴルーミの友人らしいが、その、ブルーノ・ベン＝ハック、という伯爵が持つてているらしい。その男の屋敷に保管してい、自分の美術品や貴宝などをコレクションとして集めていると聞いていた。だが、やつのコレクションは世界中でいろんな所で、勝手に盗んだだけなのじゃ。その中に、その、時の魔術師、の遺産に関するヒントの宝があるのじゃ。やつらはそれがそんなにすごい宝だと知らんが、かなりと値段が高くつくと思われた貴宝でな、もちろんやつらの警備は厳しい。じゃが、そんな事でわしらはくだばる盗賊団……じゃなく義賊として、あんな宝を手に入れるためなら、手段を選ばぬ悪党から盗み出しに行くのじゃ。あの伯爵もかなりと冷酷な男でな、なにせよあのゴルーミの仲間。あいつらに捕まつたら、おしまいじゃ。質問は？」

周りから手が拳がる事がなかつた。だが、突然壁の隅で立つている女性が、煙草を吸いながらもちらと手を上げた。それに気づいたジヤックは、その者に向かつてあごをしゃくつた。

「なんじゃ、ミシールのお譲さん？」

「ちょっといいかしら、親分さん？その町に行く前に、まずどういふうふうにその屋敷に忍ぶつもりなのですかな？こんな大勢だと、大変な荷物になりますけどね。」

質問をしたのは、ミシェルと呼ばれた若い女性だった。その格好は明るい色で、ひらひらとした薄い袖のついた上着と長いスカートは、他の盗賊とは好対照だったが、それはこの盗賊の中での紅一点の存在であることを示している。エドーが今まで知るかぎりでは、ミシェルは、見た目では息を呑むような美しさだが、意外と男性顔負けの気の強さを持つていて、表情から冷酷な性格に見られがちのため、周りの男達もミシェルだけは逆らえないといつ。

「うむ。その質問は、その町へ行きながら説明する。以上だ！だが、お前らも覚悟はできているな！？」

「（エドーは大きく伸びすると）はーいと、親分。

「よし、行くぞ！お前ら、早く準備だ！」

「おおづー！」

周囲から一斉に声を上げた。その同時に、人々はざわざわと解散する。それぞれその町に向かうための準備を始めた。彼らは、ジャックからいろいろと話を聞くうちに、外に出て行く。当のエドーは「ふーん」と人の話を聞いていないのか、つまりそうに鼻を鳴らすと、突然背後から誰かが話しかけた。

「エドー・アルフォード！！こんなところで、サボるではないぞ！さつさと準備にせんか！つとだぶん親分はそつやつて怒鳴るかもな。お前も、こんな危険な件をやるから、少しごらに気合を入れないのか？と思うがな。」

エドーは振り返ると、ベルークだった。いつのまにか親分や他の仲間達は準備が済んだのか、とっく外に出たらしく。酒場にいるのは、エドーとベルーク、カウンターでガラスコップを拭いているバーテンだけだった。エドーが浮かない顔をすると、ベルークは心配げにエドーに話しかけた。

「何があつたのか？」

「うん？いや、いや、違うっての。俺は、あんな伝説の宝が身近にあるなんて、思つてもみなかつたしよ。なんか、うそ臭エ話だしな。俺もバカじやねエから、思つていたけど。いくらなんでも親分が急

にそれを見つけたのは、そもそも怪しくねエか？」

「なかなかと賢いな、今日のチビは。確か・・・そうだな。‘そんな事に言われても、親分はそう言つたから、そりゃないのか？それに、その宝を入れたら、おれらも有名人になるかもな！！’・・・と昨日からホンジが親分の言葉を半分信じて、半分冗談な事を言つていたしな。俺もチビのように、親分に、そんなうまくいく話はあるか？」とか、「ゴルーミ一味だから、そのブルーノからの罠かもしれない」と何度も止めてみたが、結局はだめだったな。だが、その確かに証拠がないなら、実際に確かめにいくしかない・・・つとそう言ってたからな、いつもの親分は

「おい、チビ！早く、行かないと・・・あいつらに置いてかれるぞ。それに、ベルークもね。」

バーテンが静かに言つと、ベルークは承知したかのように低く頷いた。そこで、いつまでもその場で座るエドーを、ベルークは意地でもエドーの腕を引っ張り出すと、エドーは小さな悲鳴を上げた。

「い、いてて・・！分かったよ、行くつて、行くよ！でも、俺は隣町とか、行くのも久しぶりだな。」

呑気なことを言つエドーとエドーの腕を引っ張り出すベルークは外に出ると、バーテンは「気をつけてな！」と大声で言つたのを聞こえた。

酒場の裏口から出たエドーは、ベルークといつしょにある場所に向かっていた。建物と建物の間にある薄暗い狭い道で一人で並んで歩くと、エドーはベルークに尋ねた。

「それでよ、ベルーク。俺達は、あの‘フューザライダー’に乗るのか？」

‘フューザライダー’とは、この世界では一人また、二人乗りのバイクのような乗り物だ。車輪ではなく、60cmも宙に浮いて後ろに付いてある小さな風車を回しながらジェットのように走り、約100mp/sを持つ高速なスピードを持つ浮遊するバイク。その原

料はガソリンのようなものではなく、大量な物理的なエネルギーを持つ石、「オーラ・ストーン」でまたは、「光魔石」という。その石はこの世界の生活に必要な原料の源であり、豊かな文明発達したのもその石のおかげである。その石の数が多いほどかなりと馬力を出すが、使える使うほど、その石の形は削り取り出し、徐々にエネルギーがなくなるということになる。また、この世界ではその「石」で電気、火、ガスなどを起こさせる役割もある便利なエネルギーでもあつた。

「いや、それも予備としての乗り物を使うが、こんな多人数で一人ずつバイクを乗つてたら、変えて怪しまれる。だから、行く時はいつきにその町まで運ぶ、飛空艇に乗つていく。もちろん、観光客という身分でその町に行く。身分証明書など、もうすでに作つてあるから、そこに着いてから、また親分の説明があるからな。それに、あんまりここで話すと、誰かにばれるとやっかいだからな。」「・・・ふーん。」

ベルークは徐々に低い声でつぶやくと、エドーは頷いた。しばらくして、二人はその細い道に出ると、突然目の前は町から少し離れた広がる草原の土地だつた。そこには、いくつかの架空的な飛空艇が泊まつてあり、その近くに管理の倉庫と思われる大きな建物がある。「飛空艇」とは、フェーザライダー、と違つて、船体にエンジンの中に飛び必要なエネルギーである光魔石を燃焼してその熱で生成されたエネルギー、船の後ろに付いてある羽風車をその動力でまわして空飛ぶ船である。他の飛空艇と違つて、ジェットエンジン付きでさらなる高速航行可能。だが、それらのジェットエンジン（普通のエンジンとは別）は蒸気機関で作られ、かなりと光魔石を費やるため、出発以外しか使わない。エドー達が乗る船は長年、ジャックが愛用している盗賊団・タイグーニル号と呼ばれる飛空艇もある。二人はこれから乗る巨大な飛空船の泊まつている場所に向かうと、そこには何人かの盗賊達が準備していた。彼らが着てている服は盗賊のようにならざ者ではなく、一般な町にいる普通の格好だった。エ

ドーは一瞬知らない人達だと思えた。その時、飛空船に乗っていたジャックがひょこりと顔を出し、下にいる連中を見下ろした。ふつと気が付くと、エドーの姿が見えたのである。

「——ら——エドー——お前も、少しごらい手伝んか？ いくらチビでも、お前も仲間として数えているんだからな。そして、ベルークも……さつさと他のやつと手伝え！」

ジャックは、歯をむき出してエドーとベルークの方向をにらみつけると、大声で怒鳴っていた。その声を聞こえたエドーは、思わずタジタジとなつて、慌てて飛空船へと駆け出した。それを見たベルークは思わず苦笑いを浮かべながらも、他の仲間達の手伝いに入る。

風が静かに吹き、草むらがそよそよと揺れる。突然草むらの揺れが少しずつ激しくなり、強い風に吹き飛ばせる。そこには、飛空艇の底から溢れ出す白い煙。ジェットエンジンによる動力で、いくつかの巨大な円筒形の金属製の筒から煙を放射する。その煙が地面を叩くように発射し、その同時に飛空艇の後ろに付いていた風車が大きく回り始め、少しずつ飛空艇が宙に浮いていく。飛空艇内から人々の掛け声や合図が聞こえ、じたばたと床に急いで走る足音が聞こえる。そして、船の奥の部屋からエンジンのような発動する音が徐々に伝わり、部屋全体が熱くなる。その部屋にエンジンの担当をする者達は汗が頬に伝わっても、さし状のシャベルを手に取り、近くに置いてあつた石炭と思われる光魔石を必死にすくつたり、そのジエットエンジンの近くにあるボイラーの中に入れているようだ。そのボイラーから発生する蒸気は、煙に変わつて放射し続ける。飛空艇は徐々に上空し、10、80、500、1000メートルまでも昇る。1200メートルに昇つた時点で、今度は風車が大きくなると少しずつ前へに進んでいき、あちこちに散らばる雲が通り過ぎていく。盗賊達は、やつとの事で落ち着くと、飛空艇を運転する以外の残りの仲間達が自由の時間になつた。飛空艇の中には、狭いがいくつかの部屋がある。例えば地下の内部にいくと、キッチン、いく

つかの寝室や貨物室。ほとんどの人達はその各自の部屋で、トランプや賭け事などと楽しんでいるようだ。そこで、一番広い部屋は上甲坂であるキャビン（舵の操縦室も含め）と会議室でもあり、広間である。

「よーしーお前ら、これから作戦を説明するのじや。早く広間で集まれ！」

しばらくして、飛空艇が安定になつたことを確認したジャックは、キャビンの窓から顔を出すと、大声で笛を呼びかけた。一瞬その声を聞いた上甲坂にいるほとんどの人達は、すぐに広間へ駆け出した。なぜなら、親分の命令だけは逆らえないのである。気が付くと、エドーだけは樽のところに寄りかかり、欠伸しながら呆然と空に流れる雲を眺めていた。まるで、ジャックの言葉を聞いていないか、大きく伸びをした。

「いいよな、靈りてのは・・・。自由で、じწして体を伸ばすと、

「ハーハー、何をしてこる、ハーハー、お前も、早く集合せんか！ いつまでものんびりと過ぐすな……」

「はいはいつと、親分。」

ジャックはいつまでものんびりと過ごしているエドーに向かつてあらんがぎりの声を張り上げた。その怒鳴り声を聞いたエドーはふつきらんぼそうに返事すると、大きく伸びをしながらゆっくつと立ち上がった。

日が昇る」」、飛空艇はまだまだ空の上に飛行中である。広間に集まつたのは、10人ほどの盗賊達。主なジャック、エドー、ベルーグ、ホウジ、ミシールと他の雑用的な盗賊のほとんどが顔をそろえていた。ジャックは長いテーブルの奥に座ると、皆も同じくその周りに座つていた。

「よーし、お前ら！ これからやる作戦を説明する！ まず、知つていの通り、わしらは普段の格好をしてある変装するわけだ。もち

ろん、この飛空艇に乗つてやつてきた観光客と云ふことでな、そのほうが早くで、すぐに町に入りやすい。」

「でも、親分。どうして、そんな必要があるんだ？」

エドーの問いに、ジャックは話を続けた。

「それはな、最近あの町でもかなりと盗賊達に対して警戒があるらしい。おそらく、ゴルーミのやつが自分の宝を盗賊に盗まれ、その警戒をそのブルーノ伯爵に伝えたんだろうな。エドーのおかげでな。」

「ギクッ！ やつぱ俺のせいかい、親分……。」

「当然の事じやが、ここで言い争うでも始まらん。それはそうとして、わしらは、その町に着いた時点で、取り調べがある……町に入る所でな。そこで、観光客といふ身分を持つわしらは、ブルーノの屋敷の中で観光するのじや。偽の身分証明書など、もうすでに作つてあるからな、すぐに入れる。それで、ちょうどこの時期はわしらにとつてありがたいのじや。それは、バサーム町内で行われるお祭りがある。ま、単なる大きなバザーに過ぎんが。」

「どうしてそれが、好都合がいいんだ？」

またエドーの質問だつた。ジャックはがつくりとその質問にあきたように肩を落とすと、ホウジに水を向けた。

「いいかい、チビ！ お前も盗賊としての常識を知つてゐるが、もう一度おれらが説明する。（隣にいたベルークに向かつてあごをしゃくると、ベルークは頷いた）お祭りつてのはな、人がざわざわと集まる。・・・でことは、万が一おれらは屋敷で宝盗みに成功しても失敗しても、その大勢の人達の中に巻き込めば、あいつらだつて見つけにくい。だから、逃げやすいというのだぞ。」

「俺達は、たとえ屋敷内で正体があいつらにばれたとしても、屋敷にさえ出れば、こちらが有利となる。皆それぞれバラバラとなつて、少しずつ飛空艇に戻る。やつらの行動を確認しながら、じつそりと行く。万が一の場合は、フェーザライダーに乗つてとんずらしかないのである。いいな、チビ？」

「お、おうよ。分かつたぜ、一人とも。」

エドーは腕組みをして一人で納得すると、ミシェルは手を少し上げて、親分に質問した。

「つまり、親分さん？この人数で分かれて、一つのクループは観光客としてあいつらの目を盗む間に、もう一つのクループはその間に少しずつそのお宝を盗みにいく。それと、残った最後のクループは、その町で待機して、帰りも待ちながら屋敷の辺りの様子を見たり、観光客として邪魔なやつを見張るとして。そして、私達以外の人達は待機ということいいいかしら？」

「ああ、その通りじゃ。まあは、盗みに行く班じゃからヘル一ヶホンジ、チビじゅ。」

「おおしゃれー! やはり俺の出番だな、親分。」

「それと、観光客は無論、わしとお前ら（目の前にいる手下達の五人を指した）だ。わしらは、その屋敷内で情報集めじゃからな。それと、万が一のために、ミシェルとクンジは屋敷の外で待機してもらう。外から様子見をして、見張り役という事でな。それで、いいじやな？」

「よーし・・・。これからお前らがやるべき事を、しつかりと耳の周りは納得すると、それそれ一はい、親分！」と頷いた。それを見たジャックは低く頷くと、いつのまにか手に持つて居る地図を取り出した。地図を広げると、一斉にその地図に注目した。ジャックは地図の上にミニフィギアの飛空艇をバサームの町の図形から少し離れた森の地形の所に置いた。しばらくして、周りの者達がその地図を観察する中、ジャックはあれこれと地図の上にいろいろと町内の違った場所を分かれている棒の形をしたミニフィギアの人形が置かれた。おそらく、ジャックは彼ら達がどう動くのかを例えて、説明しながら置いたのであろう。作業を終えたジャックは顔を上げた。

奥まで聞けよ！」

「でもよ、俺だけが、わざわざ普通の格好しないといけないんだ。お前らだつて、大した……。」

エドーはさうつぶやくと、マントを抜いた。そこには、フード付きのハーフコートで、膝の下あたりまであるハーフズボン。忍びのように軽やかなサンダルを履き、腰巻きにひらひらとしたマントをつける格好だった。エドーは斜めをしたベルトを肩の上にかけると、背後に武器らしい短い棒を装備した。そこで、黒い皮製のグローブをしつかりと両手にはめこむと、今度は腕まくりした袖を肘あたりまでまくりあげた。あの作戦会議から数時間後、飛空艇が町に着いたのは昼間だった。数十分前に、屋敷の前に着いたエドー、ベルーグとホンジは屋敷に忍び寄るため、屋敷の近くにある森の中で身を潜んで、ジャックからの合図を待っていた。その待機の間に、彼らは盗賊の格好ではまずいため、身仕度をしていた。だが、それはエドーだけが、まだ準備をしていないのである。

「そう文句を言つな、チビ。おれらだつて、普通の格好したほうが、身動きやすいだろうに・・・。な、相棒？」

「いや、そういう意味じゃないと思うがな。」

ホンジがそう言つと、ベルークはかぶりを振った。だが彼らは、いつも通りの格好だった。エドーから言わせると、一人は盗賊に見える格好だと言つが、どう見ても普通の格好である。

「つまりだ。チビだけが、いつまでもそのマントを着ると、盗賊という事にばれてしまう・・・正体もな。あのゴルーミの事件後、あいつらはマントを来た盗賊を捜していると今日の朝に聞いた。どちらかといふと、どうみても怪しいよ、マントを着たら・・・。」「つまり、マントを着たら、正体がばれてもおかしくない・・・。」

「こいつ事か。」

エドーは腕組みをして大きく頷いた。そこで、ホンジは思い出したようにエドーを尋ねた。

「やういえ、前々から聞きたかつたが・・・。チビはどうして、そのマントを着たり、フードを被つたりするのが好きなんだ? いつ

も、仕事以外は・・・。」

それを聞いたエドーはさくと表情が変わるが、その驚きの表情を隠すかのように強く口調した。

「盗賊というのなら、格好や顔を見せないでしょ。普通はよ。それに、何を着ようと、関係ないだろ？ 盗賊なら・・。」

「ま、理由はともかくだ。エドー、それとホンジもだ。そろそろ合図も来るし、お仕事の時間だな。エドー、ホンジも準備はいいか？」ベルークは振り返ると、一人は一斉に頷いた。

## 第一話・盗賊団（後書き）

エドー・アルフォード（18歳、男）＝幼い頃から両親を亡くし、孤児であつたが、6歳のときにジャックに拾われる。そのため、6歳以前の記憶が覚えていない、素性は不明。盗賊団・タイグニールのメンバーの中では素早い行動の持ち主で、小柄で一番年少のため周りから「チビ」と呼ばれる。楽天的で自由奔放な明るさを持ち、人の話を聞かずにぶっきらんぼうな態度を取る事が多い。子供なじみがあるが、時に想像がつかないほどの頭の切れさもある。常にマントを着るのは、盗賊としての誇りを持つ証であると本人は発言するが、本当は寒がりのためでもある。

## 第三話・宝（前書き）

前回のあらすじ：

翌日、エドーはジャックから次のある宝を盗むための話を聞かされた。それは、なんとあの‘世界の伝説’に関するヒントの宝はある者が持っていた。その名は、ブルーノ伯爵。伯爵が住む町に向かうため、飛空艇に乗つていくタイグーニル団。その町にはバザーが行われ、作戦に好都合なものだつた・・・。

タイグーナーの盗賊団は飛空艇に乗つて、バサーム町に着いた。それは、盗賊頭であるジャックはその町の支配者当然のブルーノ伯爵が持つお宝、あの、世界の伝説、に関する手掛かりの宝を盗むためにやってきたのである。バサーム町は、ベリアーク町に似てヒューマン族が多く住んでいる。商人や運送などの仕事を持つ大半の人々は、ほとんどマルバード族が仕切っている。そのため、毎年に何回かバザーが町中で行われ、あちこち町から来た商人達はこの町に集まるという。だが、賑やかな祭りの奥に潜む影で、盗賊達がある作戦を実行中だった。

風がそよそよと葉を揺らし、長く並び立つ木々。昼間なのに、怪しい雰囲気が漂う大きな屋敷。バサーム町では、お祭りのようなバザーが行われ、人々がざわざわと賑やかに集まってくる。一列に並ぶ店には、多くの町の人達や観光客、商人達がいる。大勢な人込みの中に、ジャックとその他の手下達はやつとの事で目の前にあるブルーノの屋敷に着いたが、屋敷前の門にいる何人の警備たちに引き止められた。当のジャックは、何もなかつたように偽の身分証明書を警備員に見せて、観光団と名乗つた。ジャックの背後についてくる手下達は男女老人という格好した変装してあり、ジャックにつられて観光に使うカメラやバックなどを持ち歩いていた。思わず彼らは警戒を張るもの、警備員達をちらちらと何度も様子見していた。それは、盗賊達は心から正体にばれない事を祈るだけである。だが、しばらくして警備員から説明を受けながらも屋敷に観光することに許可された。最後に門に入つたジャックの最後尾についていた手下である男は、突然背後からある一人の警備員が呼びかけた。

「おい、そこの観光客団たち！それともう一つなんだが・・・」  
一瞬ジャックと手下達は心臓が破裂しそうな緊張の表情を浮かべる

と、一斉に振り返った。

しまった！これでも、ばれたのか？！？

初めて焦りを感じたジャックは内心でそう呟いた。心に迫るたびに、額から汗が伝わる。だが、その警備員はなぜか自分の顔を指すと、静かにつぶやいた。

「俺もまだ新入りだけど、ぜつたいにブルーノ伯爵さまの大切なコレクションを触れないとくださいね。この間、別の観光客団がそのコレクションである壺を触つて、注意する説明をしなかつたのでカンカンと先輩に怒られた。もちろん今後、また先輩に言われたら、責任に取られちゃうからね。まあ、それはともかく・・・。気を付けて、楽しんでください！」

そう言い残したその警備員は自分のポジションに戻るために、その場から立ち去つた。警備員達からの警戒をやつと逃れた手下達は、ほつと安心せずに、未だに固い表情を浮かべながらジャックの後についていく。もちろん、当のジャックは額に一筋流れる汗を拭くと、大きく呼吸して屋敷に入った。あの緊張感から逃れた安心感になつたかのように、今度こそ気を引き締めて屋敷の出入口に入るジャックと一味であつた。

「どうやら危うくばれたらしいわ、親分さんも。」

そう言って振り返ったのは、ミシェルだつた。エドー達がいる森の中ではなく、屋敷から見下ろす高台の上にいた。ジャックの作戦の通りに、ミシェルとクンジはその高台から屋敷や町の様子を見ながら待機している。

「親分はともかく、チビ達がうまくやらなきゃ意味ないし。でも、俺達もここで暇つぶしがよ？」

そうつぶやきながら、望遠鏡で屋敷を見下ろしていたクンジだつた。そこで、ミシェルは腕組みして顔をそむけた。だが、固い表情を浮かべながらも、口もとが微笑んでいた。

「でもまーあの子達もなんとかできると、私は思うわ。なぜなら・。

・あのチビのことだからね。」

「そりゃ、あのチビならあのコンビにとっては世話が焼けるほどですがよ。でも、珍しいですな。まさかあなたが心配しないというのは。親分以外は……」

「なーに。私はただそう思つていただけ……さて、親分の合図もそろそろ来ると思うわ。じょら！仕事をサボると、親分に言いつけるわよ。」

「はいはい、了解がよー！ミシェル譲さん。（ やつぱ、こいつだけは逆らえねエな。おまけにここで本性を現したら、さすがの俺も敵わないからだがよ。）」

そう言いながら、内心で冗談を繰り返すクンジだった。突然ミシェルは立ち上がると、腰に手に当て、屋敷を見渡した。そこで、クンジは尋ねた。

「どうしたんですか、ミシェル譲さん？」

「何かおかしいと思わないの？そのお宝が、敵の屋敷にあるのだから、重要な仕事なのは分かつていいけど……。」んな作戦がまさか私達全員で盗みに行くのも、雲をつかむような宝を取りに行くのも、あんまりにも話はづますぎるわ。それにあの親分、いつたい何を考えているかしら？」

「マジがよ……。でも、俺はいつでも親分を信じるがよ。たとえ相手の罠だと知つても、そこら辺の宝をいただけばいいじゃねエのか？盜賊らしく、とんずらすればいいがよ。」

「まあ、いいわ。とにかく私達もまだ仕事が残つてゐるのよ、早く行くわよ！」

「うーーっすがよー！」

ミシェルは背を向けると、クンジと共にその場から立ち去つた。

一方、チビと呼ばれるエドー達は屋敷の裏から忍び込んでいた。屋敷の表なら、ジャック達のように警備員に引き止められるが、屋敷の裏なら、警備員が一人、そして一人しかいなかつた。だが、も

うすぐ目の前の屋敷の裏で、森から抜けた三人達はすぐに茂みの中で隠れていた。だが、エドーは我慢できずに茂みを出ようとしたところ、ベルークに引き止められた。

「やっぱそう来ると思つたぜ。でも、なんていちいち、ここで待つたなきやいけねエんだ? 面倒だし……」

「そう早まるな、チビ! まず、あそこどうひついている警備員達をどうするかを考える必要はある。たとえ、ここで殴り倒しても、また別の人を見つかったら余計騒ぎが起つて、警備がさらに固くなる。また親分にどうされるのか……。」

ベルークは厳しい顔でエドーをにらむと、エドーの背後にいたホンジは口を開いた。

「それで? これからどうすればいいんだ、ベルークよ。いつまでも、おれらがここにいても親分に申し訳ないぜ。」

「・・・じゃない。ホンジ、チビ! こいつらはお前らに任せせる。俺はもう一度図面を確認しないとな……。だが、なるべく静かにな。」

ベルークはポケットから丸めた長い紙を取り出すと、ゆっくりと広げた。それは、屋敷内の図面であった。昨夜ジャックから頼まれた極秘仕事で、ベルークとホンジはやつとの事でこの屋敷内の仕組みである図面をどこかに盗み出し、今回の作戦を立てた重要な図面である。ホンジとエドーは顔を見合せると、互いに頷いた。突然ベルークの目の前から風のように走り出した。ホンジとエドーと左右に分かれ、音もなく茂みの中で待機していた。そこで、ベルークから少し離れたホンジはポケットからなにやら小さな丸いボールを取り出し、すぐに一人の警備員の近くまで投げた。とんとん、とボールが弾む音を聞こえた二人の警備員が慌ててその音の頬りに駆け出した。すると、茂みの近くにあつたのは単なる小さなボールだった。一人の警備員はそのボールをまじまじと見ると、隣にいるもう一人の警備員の男に話しかけた。

「おい! なんだこりや? そのボール……いつたいどこから降つて

きたんだ？」

「だぶん、あそこの森から出てきたじゃないのか？おそらく不審者がいるかもしない。行ってみるか？」

「あつ、でも待つて！こういう時というのは、やっぱ誰かが仕掛けてきて、その隙に背後から何者かが忍び寄る、とか……まるで罠みたいに……」

「そんな、まさか……な」

とその警備員は笑った。その時、突然背後から人の声がした。

「だよな？ 気付くのも遅いねエ、おじさん達も。」

その不敵に笑う声が背中から聞こえた刹那、一人の警備員は後ろに振り返る同時に、背後から飛び襲いかかつた何者かに、同時に蹴り倒された。それは、エドーの見事な二段蹴りを後頭部に決められたのである。顔面を地面に強打した一人の警備員たちは、悶絶したまま一度と起き上がらなかつた。エドーは振り返ると、さつきから茂みに隠れて、図面を読んでいたベルークとあのボールを拾うホンジが姿を現した。

「さすがのチビだぞ！ 見事な蹴りでしたな、えーい？ また、騙し蹴り作戦」。・・・いつでも上出来だ。」

そう言つたホンジはエドーの頭に手を置くと、二人は笑つた。ベルークは相手を念入りに、一人の警備員達を手近な木の幹に縄で縛り上げると、いつまでも有頂天に続いているエドーとホンジに向き直つた。

「さーてと・・・。ここで、もたもたする暇はないな。（図面を取り出し、二人の前で広げると）もう一度、この図面で侵入作戦を説明する。ホンジ、説明を。」

「はいはいっと、相棒。チビ！ 分かっているだろうが、お前の素早い足で屋敷（屋敷を指しながら）の最上階である三階まで登れ！ おれらはあとで合図をしたら、すぐにお前はいつものようにとんずらするぞ。もし、お前がその宝を盗んだ時点でな。おれらはその図面通りに、屋敷内にいる親分達と連絡して、すぐにとんずらするぞ。

もし、そこで親分やおれらの正体がばれたらな。とにかく、お前はあの図面通りの道に進み、あの部屋で宝を盗んだら、ここでおれらが待つていいからなあ。急げよ、チビ！」

「おうよ、任せとけって。あとは、頼むぜ。」

そう言つたホンジはポケットから鉤爪に付いていた長細い縄を取り出した。それをエドーに渡すと、互いに頷いた。そして、一人がエドーのそばから離れるとエドーはその縄を弧のように思い切り振り回し始める。突如縄が屋敷の壁に向かつて勢いよく投げ飛ばすと、屋敷の頂上にある鉄の柵に引っかかった。安全を確かめるために、縄を引っ張り出したりすると、エドーは一人に向き直った。

「じゃ、あとでな。」

そう言い残したエドーは、縄をつかみながら壁に向かつて足をゆっくりと踏み出した。その瞬間、エドーの身体は垂直に立つ壁の表面を、まるで地面でも歩くようにすたすたと縄をつかんで登つて行った。エドーの様子を見守っていた二人は、いまや無事に屋敷の三階の窓に着いたエドーを見て安心すると、その場から急いで立ち去ったのである。

屋敷内の電燈は明るかつた。廊下には、端に一列と並ぶ花瓶や絵、さまざまな装飾品がある。辺りの人の気配がなく、静かな雰囲気が漂つ。あんまりにも静けさだつたため、慎重に廊下の奥に進もうとする小柄の人影が歩いている。エドーだった。やつとの事で窓から忍びこんだエドーは廊下の真ん中だと気づき、ベルークに言われた通りにある場所を捜していた。彼らが求める宝は、この屋敷の三階にある伯爵の書庫の部屋に隠しているという。エドーはそれを知ったのは、盗賊団の情報源であるベルークによる報告だった。窓から入り込んだエドーは、いつもの調子と違つて、肌までビコビコと緊張感が沸いてきたようだ。

「確かに、あそこだったつけな？ずいぶんと怪しいもんだぜ、この屋敷も。（ とよりも、うまく行きすぎだつての）」

そう低く独り言を呟つと、エドーは壁の左角を曲がった瞬間、急に立ち止まつた。急いで背を壁に寄りかかり、横目でゆっくりとその角の物陰から何かを見つけた。そこには、たつた一つしかない部屋の扉が奥にひそむ。エドーの脳裏からベルークが言つていた事、その部屋は間違いなく書庫であつたと改めて気づいた。だが、その扉の左右には、警備員が見張つてゐるのであつた。

やっぱ、宝は邪魔者が付きものか・・・。出入口はどう見てもこゝしかないし、あの奥に窓ですらねエな。ベルークの呟つとおりに、あんま、こゝでもたもたする暇はねエーみたいだな。

エドーは警備員を見たとたん、かなりと厳しい状況だと内心でつぶやいた。なぜならここでいくら殴り倒しても、宝を捜すのにも時間がかかる。その間に、援護が来たら、もはやあとは時間の問題だけになるのであつた。その時だつた。エドーが来た廊下から誰かの足音が近づいてくるのを聞こえた。誰かとは判断できなかつたが、おそらく警備員だろう。エドーはもう一度確かめるために目を静かに閉じ、耳をさらに澄ますと、辺りを集中した。普段のエドーがそんなに冷静的な判断を持つ持ち主ではないが、気配を感じることは誰よりも敏感だつた。「トトト」とその足音が近づく度に、エドーは少しずつ焦りを感じはじめ、心臓の振動がドクンドクンと徐々に速くなつてくることが聞こえてくる。エドーは目を開けると、チツと舌打ちをした。

「ずいぶんと早いな、もう交代の時間か?」「向こう側の廊下から來た一人の警備員の姿を現すと、扉の前で見張り中の左側にいる警備員が言つた。

「あ、はい! そろそろ時間なので・・・・」

その警備員が扉の前にいた見張りの一人の警備員に慌ててそう告げると、もう一人の右側にいる警備員が頷いた。

「分かつた。あとは、よろしくな。本当にこゝの見張り仕事もいいかげんに疲れたし。それじゃ、あとでな。」

そう言い残すと、大きく伸びをしながらその場から立ち去った。左側の警備員が頷くと、その警備員に向き直った。

「それじゃ、今度お前の番だ。」

「えつ、はい？」

「うん？なんだ、まさかお前もまだ新入りなのか？・・・しようがないや。さつきのあいつも一ヵ月前の新入りだったからな。それにしても、最近この屋敷も、どんどんと警備員を募集とは・・・。だぶん、最近の世の中も危なくなつたでことだな。でも、先輩であるおれに感謝しな。なぜならお前が新入りだから、なおさらだ。まず、お前は書物の整理や確認をしてほしい。本当はおれの担当だけど、新入りであるお前にまかせる。おれはここで見張るから。整理ぐらいい、できるだろ？？」

「あ、はい！もちろんです、先輩！ぼくに任せてください！」

その新入りの警備員は頭を下げる、扉をあげた。中に入った警備員は、振り返ると先輩である警備員は「それじゃ、あとはよろしく！」と言つて扉を閉めた。扉を閉めたせいか、突然辺りは薄暗かつた。だが、目の前が大きな書庫があつたことに気づく。部屋全体に並ぶ書庫、壁に据え付けられた棚にはぎつしりと本や巻物などが並んでいた。新入りの警備員は念のために電気をつけようと思つたが、そのスイッチをつけようとしなかつた。警備員のぼうしを外すと、銀色の髪の毛が逆立つ。その警備員の正体は、なんとエドーだった。いつのまにか警備員に変装したのか、あの時廊下での出来事だった。それは、警備員だと分かつっていたエドーは、幸いにも一人だったため、密かに殴り倒すことができた。そこで、エドーは見張りの警備員の事を考えた挙げ句、殴り倒されて氣絶したその警備員の制服を奪いながらも、うまく本物の警備員のように芝居したのである。危うくばれそうもなく、警備員達は単純だつたため、やつとの事でこの書庫に入ったのであった。

「本当、こんな芝居ぐらいで騙されるとはな・・・。取りあえず、あいつらに一つぐらい感謝しないとな。さてと、今度こそお仕事の

時間だ。」

さつきの危機を逃れて安心したエドーは、周りに並び立つ棚には田もくれずにベルークに図面で教えてもらつたとおりに奥に進んだ。「ベルークはここからだと知らないというけど、まー自分で探すしかないか・・・。いつたいどこかな?「うん?」

エドーはあちこちと部屋中で探し回るうちに、ある棚の上に他の本とはわけて置かれていた一角の本を見つけ出した。

「なんてこの本だけ出でているんだ?」

エドーはその本を取つた瞬間、突如本棚が動いた。徐々にゴトゴトという響く音が部屋中で伝わり、本棚自身が扉のように回転した。「わあ!」と叫んだエドーはそこから少し離れると、その本棚は開いたのである。それは、隠し扉でもあった。それに気づいたエドーは、驚きの表情を浮かべながら、まじまじと見るばかりだった。

「マジか・・・よーまさか、隠し扉とは・・・。宝の話、親分の言うとおりありそうだな。その奥に・・・。うん!?

エドーは扉の奥へと入ろうとしたその時だった。奥から誰かの走る足音が聞こえ、エドーに向かつて駆け出してくる。扉の奥は真っ暗で、肉眼では見えなかつたエドーは確かめようとした。突然人影が身を乗り出してエドーに向かつて走り出したの気づいた。目を見開く瞬間もなく、エドーとぶつかつた。

「わあ!!なんだ・・・。って、えーっ!!!」

エドーは勢いよく吹き飛ばされたすぐにエドーはほこりを払いながらも立ち上がると、顔を上げた。思わずそのぶつかつた相手の姿を見て驚いたのである。そこには、息を切らせながら、力もなく姿勢を崩した少女だつた。身体全体に白いマントに覆いかぶせて、頭上にフードを被つており、その少女の顔を伺えなかつた。だが、その少女は少し顔を上げると、ツヤツヤとしたきれいな茶色の長い髪の毛を伸ばし、右耳から肩までの細長い付け毛がついてあるのを見えた。ノースリーブで胸のマークは針金のような紐で縛り、両腕にベルト付きのリストカバーをしていた。少女は立ち上がると、マン

トが少しつれ落ちた。ソフトな長いパレオのようなスカートを着ていたのははつきりと見えたのである。ようやく事態に戻ったエドーは眉をひそめると、その少女をにらみつけた。

「つて、おい！？なんだなんだ？いきなりぶつかるとは……。  
( まさかこの屋敷の人間か？そうだと知つたら…… )」

「・・・・！？また追つ手か・・・・」

エドーの警備員の姿を見て、こここの者だと勘違いされたらしい。その少女は嫌そうな表情を浮かべて背を向けようとして、慌ててその場から逃げ出そうとした。だが、次の瞬間。エドーはその少女の腕首をつかむと、強く引っ張つた。突然に腕につかまれた少女は、青白い顔でエドーをにらみ返した。

「な、なにするの！？は、離して！」

思い切り悲鳴を上げようとした少女は、突然エドーの手に口を塞いだ。だが、その少女はひどく苦しげな顔をしてかぶりを振つたり、エドーの手から振り払おうと必死だつた。混乱に落ちたその少女に対し、エドーは歯をむき出しながらシッと息を吐いた。

「シッ！静かにしろっての！大声を出したら、俺まで捕まっちゃうから。ほら、頼むから！俺も、今大変なんだぞ。あいつらに見つかると、宝盗みところか・・・・」

エドーが慌ててそう言つと、少女は一瞬、「えつ？」と疑うような表情に変わつた。やがてエドーに対する警戒を解けたように抵抗をやめると、エドーは手をその少女の口からそつと離れた。だが、腕はまだつかまつたままである。その少女は厳しい表情を浮かべると、エドーをにらんだ。

「( )には、いつたいどこなの？どうして私が・・・・」

「はあ？俺も訳分からん！お前( )は、ここの人間じゃねエのか？それについてだが、お前？誰なんだ？宝つて本当に・・・・」

エドーが言い終わらないうちに、突然さつき少女が出てきた隠し扉から無数の足音が近づくのを聞こえた。どうやら隠し扉から何者かが急いでこちらに走つてくる模様だった。その足音を聞いた少女は

エドーの腕を振り払おうとしていた。まるで、誰かに追われていた  
よつよ・・・。そこで、エドーは一瞬にその少女の腕を離した。な  
ぜなら、ここで言い争つても意味がないから、とそう判断したので  
ある。その少女は一瞬にエドーの顔を見て戸惑つたが、やがてエド  
ーから顔をそむけると、無言のまま走り出した。扉を乱暴にあげる  
と、外に立っていた先輩の警備員が、呆然と振り返った。唖然とそ  
の瞬間を見守っていたエドーと外にいた警備員は、少女が書庫から  
飛び出して廊下へと走り続けるのを見ていた。だが、突然隠し扉の  
奥から何者かの姿がこちらに近づいてくるのを見えてくる。

「ふたく！」なんて次から次へとまた面倒くせエ事に巻き込むんだ  
！？それに、どうすればいいんだっての、これから・・・。  
その瞬間、もはや焦つてしまつたエドーは内心で迷つっていたのであ  
る。ここでやつらに捕まられるか、それとも・・・。

人物紹介／タイグーナー郎団のメンバー達：

ジャック・ハウロール（61歳、男）＝盜賊団の頭で、エドーの育て親的な存在である義理と人情を守る義賊。自称は義賊として宝を盗むが、その部下たちはほとんどならず者や泥棒が多く集まる。そのため、常に部下とは厳しく、頑固な性格。だが、その裏腹に、部下達を暖かく眼差しや優しさに満ちている。

ベルーク・クレイト（29歳、男）＝常に沈着冷静で頼りになるリーダー格を持つ性格。ジャックの右腕として情報収集や作戦立てを担当するポーカーフェイスで、エドーの兄貴分として慕われる。時に辛辣な言葉を口調し、長年の相棒で行動派のホンジとは対照的に寡黙の友である。

ホンジ・オルティ（28歳、男）＝エドーよりも前向きで明るい性格。ジャックの左腕として、仕事の準備や仲間集合などをかけ、場を盛り上げる賑やかな役を自称するが、ベルークから注意されるほど。エドーにとつても兄貴分で、エドーと気が合つ。常にベルークとは行動を共にすることが多く、二人三脚のような仲。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8693a/>

---

約束の木～世界の伝説と時の遺産～

2010年10月9日03時04分発行